

平成 29 年度第 1 回平塚市博物館協議会会議録

■開催日時 平成 29 年 5 月 26 日（金） 10 時～ 11 時 50 分

■開催場所 平塚市博物館 特別研究室

■会議出席者（敬称略）

副会長 椿田有希子

委員 大野秀樹、澤井建二、平井 晃、安室 知

事務局 澤村館長、縣館長代理（管理担当長）、栗山館長代理（学芸担当長）

■傍聴者 1 名

■会議の概要

1 開 会

館長挨拶

2 議 事

（1）報告事項等について

- ・平成 28 年度春期特別展について
- ・「こどもフェスタ 2017」について

（2）平成 29 年度事業計画について

（3）その他

- ・事務連絡等

■議事および質疑

議題（1）報告事項等について

◆平成 28 年度事業のうち春期特別展「女の子と男の子のお雛さま～桃と端午の節句人形」について、事務局栗山館長代理が説明資料により説明。

委員 3 回ほど展示を見た。素晴らしい、の一言で言いつくされていたと思う。他の同様の展示よりも数的に多く、特に豆雛は展示されるのは大変な努力だと感心した。会場にいらっ

しゃった方の中には、また来年見たいとおっしゃっていた方も何人かいた。

委員 今回の展示でアンケートにも書いてあるが、圧倒的にすごい迫力。本来は展示物があつて説明があるが、説明が一切なくてお雛さまを見るだけで感動するような気持ちで、ここにもあるような感動でいっぱいアンケートだったと思う。素晴らしいと思う。

あとは、展示の方向性だと思う。展示の内容によってだが、説明パネルがほとんどいらなような展示もひとつの方向性だと思う。なので、上手く所蔵で色々あつたら是非検討してもらいたいと感じた。

委員 40組の雛人形を製作年代順に展示されていたが、どのように判断されたのか？

事務局 お雛さまの年代はそれぞれ寄贈して頂く際に誰が、いつ、どういう形で入手したものか、お話を伺って、それぞれのお雛さまに、持っていた方の背景の情報をつけていた。近世のお雛さまについては、箱書きの年号をもとにしていて、人形の専門家の方にも教えて頂きながら年代の設定をした。

委員 私の学芸員時代を思い出すとコレクターに一括してもらったものが多く、年代の設定に困る事があつたが、平塚市博物館はきちんと生活者から寄贈して頂いた記録が元だということ、よくわかつた。

委員 一般の人の興味を引くテーマは地域性を持ち出すのが難しいと思うが平塚市博物館は開館当時から地域型の博物館ということで平塚の特徴をどのように生かして展示されていたのか。

事務局 地域性として強そうだと思うのは市内に人形店が2つあつて、そこから購入したという情報が平塚の地域性高いものだと感じる。

人形の顔、飾り方などは平塚、せまい地域の特殊なものはない。見て頂く展示の中では、独自の地域性が打ち出しにくい部分がある。

別の機会に展示する際には、寄贈者の方の生活の情景などミックスした形で節句の行事・習俗・風習等を今後、打ち出していければお雛さまとセットになつた地域性がある展示になるのではないかと。今回はあまり地域性というのは強力的に出したものではなかつた。

委員 人形の飾り方などそんなに差がでるものなのかと疑問だったが、来歴、持っている方の

背景などがどういう位置を占めるのかなど、そのようなやり方によって地域性が出して行けるということを知ることができ勉強になった。

事務局 補足させていただくと、今回、この地域の方が人形をどこで買い求めているかに着目した。しかし、思いのほか地元のお店で買ったものがそろってこないのが、傾向としてある程度統計的な形で見えて頂くというところまでは至らなかった。今後、地域の博物館がどんな事をテーマにしていくのかという中では、生活の範囲の物を入手する事がどんな風に移り変わっているか、という視点は必ず、必要になってくると思う。資料自体に着目して地域の特色があるかはもちろんだが、生活の範囲というものが資料からわかっていくという点も今後取り組んでいきたい。

委員 民俗だけでなく、近代の生活史、歴史をやるうえでも大事な事だと感じた。人形に限らず生活圏や商業圏なども明らかにしてもらえるとありがたい。

委員 「入り口が分かりづらく帰ってしまうところでした」という意見があった。おそらく初めて来られた方だと思う。どこで何をやっているのかという誘導もポイントになってくると思う。

事務局 今回、奥を出入り口としていつもとは違うようにした。オープン当初は、迷っている方がいるのは事実であった。このことを踏まえ廊下にも入口は奥であるという事を示す案内を増やした。なかには古民家でも展示をしていたのでそれが特別展であると勘違いして帰ってしまいそうになり、慌てて奥の展示室にご案内したという事もあった。導線をどうするか、入り口からどうご案内するかは課題があったと思う。ただ1番奥に入り口を作った事で成功したこともあった。期待が膨らむような工夫を考えられればと思う。

委員 最初に来たときは、ちょっとわかりづらかった。でもこういうやり方もあるのだと理解をした。色々あって良いのでは。かえってその方が良いのではないか。さらに広がると思う。

◆平成28年度事業のうち「こどもフェスタ 2017」について、事務局栗山館長代理が説明資料により説明。

委員 毎年同じ内容のものがあるが、マンネリという面に関してはどう思うか。

もう1つは午前中にイベントが集中するという事で午後にもう少しイベントがほしい
ということで、アンケートには3件も火起こしが書かれている。176名ということで多か
った。「火起こしが混んでいて出来なかった」という1年生の女の子からの意見があった。
どうしても集中するイベントとそうではないイベントがあるがそこをどのように改善して
いくのか。

事務局 同じイベントに関しては、例年変わっていない。いずれも人気があるイベントだが、これ
に変わるものをどう考えていこうかという話題にはなる。来年度、新しいイベントの事
は考えている。ただイベントとして大勢のお子さんたちに楽しんでもらうためには、その
ための備えが必要。シミュレーションというものもしっかり行っていかなければいけない
と残念な結果になってしまうので、じっくりと考えていきたいと思う。

また、ネタとしては同じかもしれないが、毎年参加されるお子さんには新鮮な経験、体験
というものを提供できているので、一概にマンネリ化しているわけではないと考えている。

午前・午後のイベントの配分に関して、今年度一番大きく変えたのは、例年火起こしを午前
中であったものを午後にまわした点である。午前中に屋外展示が大盛況になる反面、それ
が終わってしまう午後は博物館の外回りが閑散するというのを避けた。なので、終日人
が絶えないという状況になった。

イベントの内容も含め、新たなイベントというものを企画するときには、それをどう配
置していくのか、それは全体の賑わいも考慮したうえで考えていきたい。参加する人が参
加しやすいような、出来るだけ多くの人に参加できるような配置を第一に考えていきたい。

列が長くなってしまった火起こしだが、特別展で使用した資材との兼ね合いがあり、長
机が使えず、一人の参加者にかかる時間が伸びた事も原因のひとつである。資材の配分
にも気をつけていきたい。マンネリという事に関してだが、毎年楽しみに来ている方も多い。
行事が飽きられるよりは楽しみに来てくれている方が大きいと感じるのでまだマンネリと
いう判断はしていない。

火起こしの列が長くなった原因として、昨年と今年で着火剤の量を少なくして技術革新
を古代生活実験室の方でしている。参加しようとしている方が着火剤を作る時間は短縮さ

れているということで進化の結果でもある。

委員 博物館のキャパシティとして、空間的・人数的に、どれくらいの人数が良いのか。周知はどのようにしているのか。毎年楽しみにして来てくださるかたがいるリピーターの方はどれくらいいるのか。

事務局 人数が適正かどうかという事に関して、こどもフェスタは自由参加で参加出来る形が多いので、全体の数としては限界値ではない。火起こしでは改善をしていかなければいけない点がある。

こどもフェスタの周知として博物館の行事で圧倒的に強いのは「広報ひらつか」である。市内全戸配布していて、毎月第一金曜日に博物館のイベントを囲み記事にしてのせていると市民の目につきやすい。また、イベントの名称ものせている。ホームページのほうではイベントの開催時間を紹介している。博物館広報誌の「あなたと博物館」では詳しく紹介している。

リピーターに関しては、アンケートの枚数は少ないがフェスタの過去の参加を経験したお子さんであると答えたのが10名、ないと答えたのが17名。初めて参加したというお子さんが多いと思う。

リピーターに関して補足すると、総合案内対応での体感的には3割くらい。また、バックヤードツアーでは、参加した事がある感じの方は2割程度だった。

委員 これだけのイベントが飽きられることもなく12回も続いてすごいと思う。

委員 「お雛様さがし」は、きちんとした特別展があるからこそ連携してこのようなイベントができると思うので、博物館のあるべき姿だと感じた。「ウォーリーを探せ」のように子ども向けすると感じた。おもしろさが伝わったものになった。

こどもフェスタの時にクリアファイル一枚でも配るといいのではないかなと思う。最初は子どもが使って最終的には親が使うという宣伝力があると思う。なにかやれば印象に残ると思う。

事務局 景品については予算面の課題があるがクリアファイルなど今後の宣伝を兼ねたものは良いと思う。

委員 国立科学博物館で「博物館の達人に挑戦しよう」というパンフレットがおいてあった。子どもフェスタでもイベント参加記録のような教育的な面での工夫が考えられると面白い事ができるのではないかと思った。ポイントカードやクリアファイルなど、博物館を楽しんで、なじんでもらう形にしていくと良いと思う。

委員 小学校の子ども達が博物館を利用する際、学校独自に学習カードを作ってくるのだが、博物館としてのものがあると利用しやすいし、子ども達も記入しやすい。先生たちもなかなかじっくり博物館に来て資料を作るのはやりにくいので、博物館としてこういうのをポイントに学んでほしいというのを記入するカードがあるとやりやすいかと思う。子ども達も何回も来られないから、来たら調べたいことを調べられるようになにか用意されてあると、学校に持ち帰ってもまとめやすいと思う。

事務局 イベント以外にも子ども達向けに何か出来る事はないかという意見については、まず子ども達向けの何かを用意出来るかどうかという課題になる。まずは子ども達、あるいは子どもを連れた世代の方々、そういう方へのサービスというのはどういうものが良いのか研究からしっかりと行っていきたい。そこからまた有効な動機を考えていけたらと思う。このような例を示していただいた事が学芸員の動機づけになる。

また、ワークシートを作りたいという気持ちはあるが簡単ではないという事で、主に展示での利用ということを前提にしたご意見であると思う。展示解説されるボランティアのみなさんも、それぞれの学校にいらした方に対応しながら蓄積しているものがあると思うのでそういう部分とも意見を交わしながら検討していきたい。

委員 平塚の学校の場合も市のパソコンを持っているから、紙でなくてもデータを送って頂ければ、それを印刷して配ることができる。

委員 平塚市博物館の場合には小学校との連携で総合学習の時間の場として博物館を利用することはあるのだろうか。横須賀市は50の学校があるがそのうちの8割の先生が博物館に来て担当学芸員が提供する。教育的効果は高いものになるのではないかと思う。

事務局 電子的な手段であれば、かなりバラバラなものをひとつにまとめると総合的なものになるという考えもある。良いものがあれば先生方に利用して頂く、そんなスタイルもあると

良いと思う。プログラムを作るという意見に関して、学芸員が1分野1人ということでも対応するのか悩むところである。

子ども達だけを呼んでプログラムを提供するだけではなくて、担任の先生と事前相談して、できるだけ先生にやっていただくという形は、連携するまでのプロセスが大変だと聞いている。しかし、周知されれば、博物館を活用する学校の増加や授業での効果につながると思う。

先生方にも積極的な参加をお願いしなければならないシステムなので、平塚市内の学校の事情という事も考えていかないといけないと思う。教育研究所の方々と情報交換して今の平塚市の学校はどんなニーズがありそうかなど探りながら、考えるきっかけにしたい。

先生も赴任されて地域になじみないので、地域の資料をどう使って良いのか分からないというのが問題になっている。どのように使っていくのか、資料を作っているところである。2年ほど続けてきた成果を7月に発表する機会がある。そこから地域の資料を知ってもらったうえで、上手く博物館の利用につなげてもらえれば良いと考えている。

議題(2) 平成29年度事業計画について

◆平成29年度事業計画について、事務局栗山館長代理が説明資料により説明。

委員 分野ごとに独立しているイメージが強い。過去に携わった博物館で、民俗分野と天文分野が協力してハレー彗星についての聞き取り調査を行った事がある。総合博物館の良いところは自然と人文が連携して何かができる事なので、分野を超えた連携、地域総合博物館ならではの企画が1年に1回あると博物館としてのポテンシャルが上がると思う。

事務局 分野間の連携・協力は重要なポイントであるが、正直、上手い案が出ないと難しい。この夏には、3館コラボの『絵本で見る地球』で地質と天文が連携を図る。特に地質と考古はもっと考えれば色々なところが見いだせる。地形のでき方を観察しようというところでは、洪水・水害対策という事で歴史とも連携ができるのではないかと考えてはいるが、それをイベントとして成立させるのは難しいところではある。

また、「平塚学講座」も開催している。これには全分野が参加し現地実習し、展開してい

る。

事務局 事務局からの質問になるが、ハレー彗星の聞き取り調査を行ったのは、そのために調査しに行ったのか、それとも別の調査をしに行き、その時に一緒に行ったのか。

委員 天文の学芸員が企画展を企画してハレー彗星の企画展を行った際に、その1コーナーとして聞き取り調査の展示を行い、更にプラネタリウムにも活かすということをやった。

事務局 参考にさせていただく。

議題（3）その他

◆議題以外の話題等。

委員 茶室は使われているのを見た事がない。スペースが非常にもったいないと思う。

入口すぐの展示コーナーのうち「引き出し」を開けている来館者が少ない。引き出しの中も見られるような工夫があれば良いと思う。

博物館のホームページの博物館日記など素晴らしいが、前回確認した動画に関してその後どうなったのか。

事務局 茶室について、開館当初茶室として利用するという構想があったが現実には、水が使えるかどうかや照明の問題があって、使用に耐えないという意見があった。スペースとしての活用としては過去に展示替えの中で別の形で利用するという案が考えられたが、事情があって実現ができなかった。展示室の一角なので今後も活用を考えていきたいと思うが、それには予算が必要になってきてしまう現実がある。展示替えが可能になった時に、と思う。

エントランスの引き出しの展示は配置が下の方で、気づきにくい場所である。本来はあの場所に仕掛けをつくる事自体無理があるのかもしれないが、気づいていただく工夫はしていきたい。しかし、その「気づく」という行為を自発的にうながして、「こんなところにも！」と視野を広く持つという来館者の方のステップにしたいという思いはある。しかし、全く使われていないという事では意味がないので、注意深く見ていきたい。

ホームページの動画について、学芸担当の会議の中でも話をしているところで、心がけ

てはいるがなかなか有効な形に利用されているとは認識していないので課題である。

委員 バスを使おうと思い、ホームページをひらいてアクセスを見たら、バスの会社も乗り場の情報もない。知っている人は使えるが知らない人が見たら情報が不十分である。美術館の方は4番乗り場と書いてあった。リンクとしてバスの時刻表が見られるようになるとはじめての人でもわかりやすいと思う。

事務局 バスのリンクは詳しくする。

エントランスの引き出しの展示は、自分で何か見つけ出す、という姿勢を学んでもらうねらいでこのような形になっている。「扉は開けるが引き出しはあまり引かない」という来館者の行動傾向として、今後、展示の手法の中でひとつの事例、結果として活かしていかなければいけない事だと感じる。

動画の視聴回数が増えていない、ということは魅力ある動画が作られていないという事にほかならない。春期特別展の動画をアップしているがあまりにも長編で見る気が起きないと思う。展示を紹介する動画の制作経験がなかったのでコンテンツを増やして研究する必要があると考えている。

委員 民家の囲炉裏のゴトクの向きが天地逆ではないか。民家の使い方として聞き取り調査を行った上であのようになっているのかもしれないが、ポピュラーではないと思う。

事務局 民俗担当の学芸員に確認し必要であれば修正する。

◆次回日程を調整し閉会した。

以 上